

# とくしま 見 発 再 見 物 建

⑤

山川町の高越山の登山口に、伽藍を構える明王院の一角に、上層が方一間という珍しい塔が建つ。この塔は、多宝塔の変化した形として、多宝塔流行の終末期である一九〇八(明治四十一)年に一信者の寄進により六地藏堂として建てられた。初層三間、上層一間の小規模な二重堂で、近辺では類例を見ない特異な形態をしている。

初層は四方に切り目縁を回すが高欄を省略。切り目と内法に長押を回し、柱頭部は組み物を使用しない。正面性を出すために両側に連子窓をはめ、中央に観音開きの板戸と、上部には額が掛けられている。上層は裳階(軒下壁面に造られる心さし)の差し掛け。屋根の上部に直接高欄を置き、初層と同じように長



組み物を使用せず、簡素に造られている初層の軒下



なく、現代に建てられているものは、史跡としての復元であった。これに対して仏塔建築は、天守閣より千年近くも早く誕生し、その建立は休むことなく、現在までも続けられ、今日でも宗教建築の大きな分野として、次々と新しい塔が造られている。塔は、釈迦の御骨(仏舍利)を納める施設として、古墳時代にわが国に

## 類例見ない特異な形態

### 明王院(山川町)の二重堂

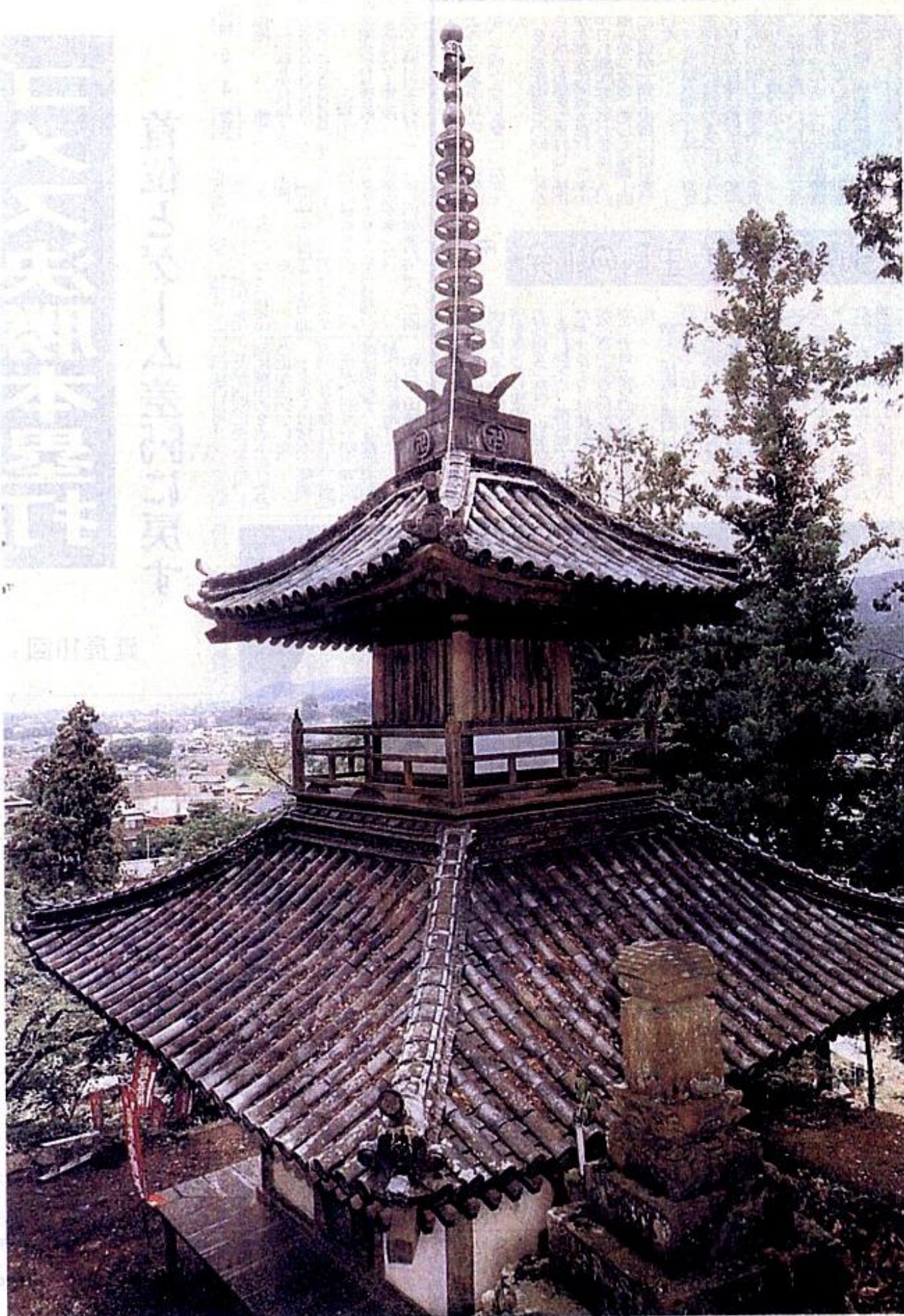
押を回す。柱頭部も同様に組み物を使わない簡素な造りである。屋根は裳階と同様に宝形造り本かわらぶきで、頂部には露盤と請け花・九輪・宝珠などの相輪を立てて、塔としての威厳を保っている。

水煙や竜車を持たないところは定石通りだが、多宝塔のもう一つの特徴である宝額は

城郭建築の天守閣と、寺院における仏塔建築の、天に向かつて高くそびえて立つ雄姿など、多種多様な塔が建つ。多宝塔は原則として、奇数の層によって構成されている。従って三・五・七・九・十三の層からなり、最大のもは石川町小松市の小松天満宮に建つ十五重塔・石造(市有形文化財)である。なぜか偶数の塔や、十一重の塔は建てられなかった。三重や五重塔(全国に分布)、東大寺



稚児棟をつけない隅降り棟。先端にはシンプルな形の鬼がわらがついている



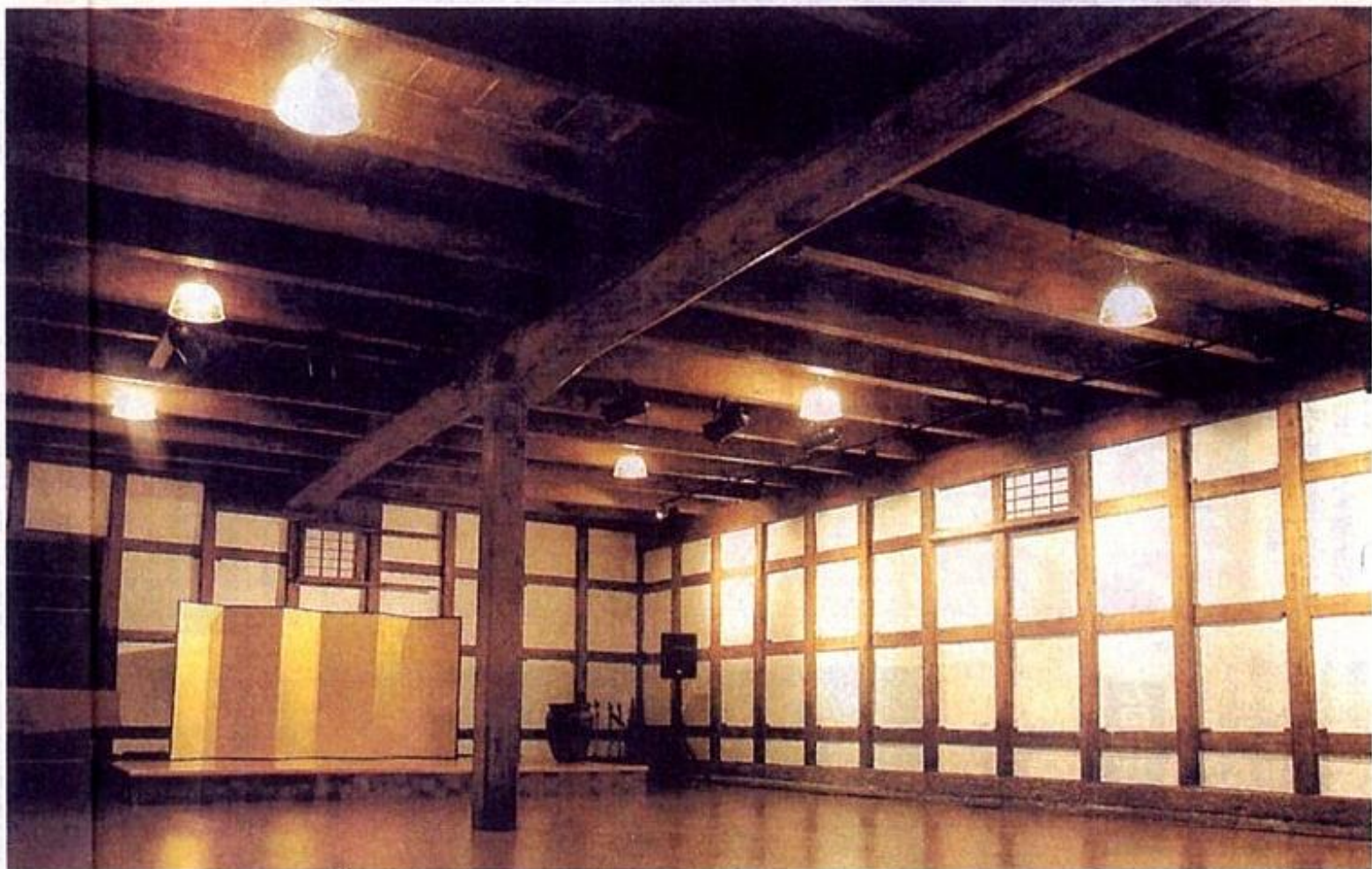
初層三間、上層一間の多宝塔から変化した明王院の二重堂。屋根上部の相輪部は多宝塔の威厳を保っている

の七重塔(現在は遺構のみ)、談山神社の十三重塔(国・重要文化財)などが伝統的な木造で建てられ、その他には石造りのものが全国に多く分布している。

一見、二重の塔に見える多宝塔も、初層の屋根は裳階であって、二重塔ではない。県内には、熊谷寺(町・有形文化財)のものを含めて五基あり、熊谷寺多宝塔は安永(一七七四)年の建立で、それは、全国的にも類例を見ない塔である。また多重塔として、土曜日に掲載します。

《メモ》明王院(月光山宝積寺)麻植郡山川町井上。真言宗高野山金剛峯寺派、本尊は不動明王。弘法大師の開基創立伝。

多宝塔 宝浄世界に出現したという釈迦如来と、多宝如来との二仏をまつ。しかし、現代において他の仏像に変わっても、そのまま多宝塔と呼んでいる。上層四間、下層方形で、上層に魚腹を付け、宝形の屋根と下層に裳階を付けたもので、平安時代から密教寺院に多く建てられた。県内に見られる多宝塔は、インドの系統らしく、宝塔の軸部に裳階を付けたもので、魚腹はその上部の名残である。多層塔と違って水煙と竜車を欠き、相輪の請け花の位置から隅棟に向かって鎖をつなぎ、鎖に風鐸をつるすのも多宝塔の特徴である。



杜氏たちの息吹が感じられる酒蔵。南蔵1階は音楽ホールに生まれ変わり、半間ごとに組まれた柱と梁が音響効果を高める

### 勢玉酒造 酒蔵

とびらを開けると小ぶりな杉玉がぶら下がり、その奥に二棟の酒蔵がし字型に建つ。南に建つ蔵は中蔵となる建物であり、東プロの音楽家集団が観客を魅了し、毎回予約が必要ほどの人気である。二階は音楽ホールとして、現在は音楽ホールとして

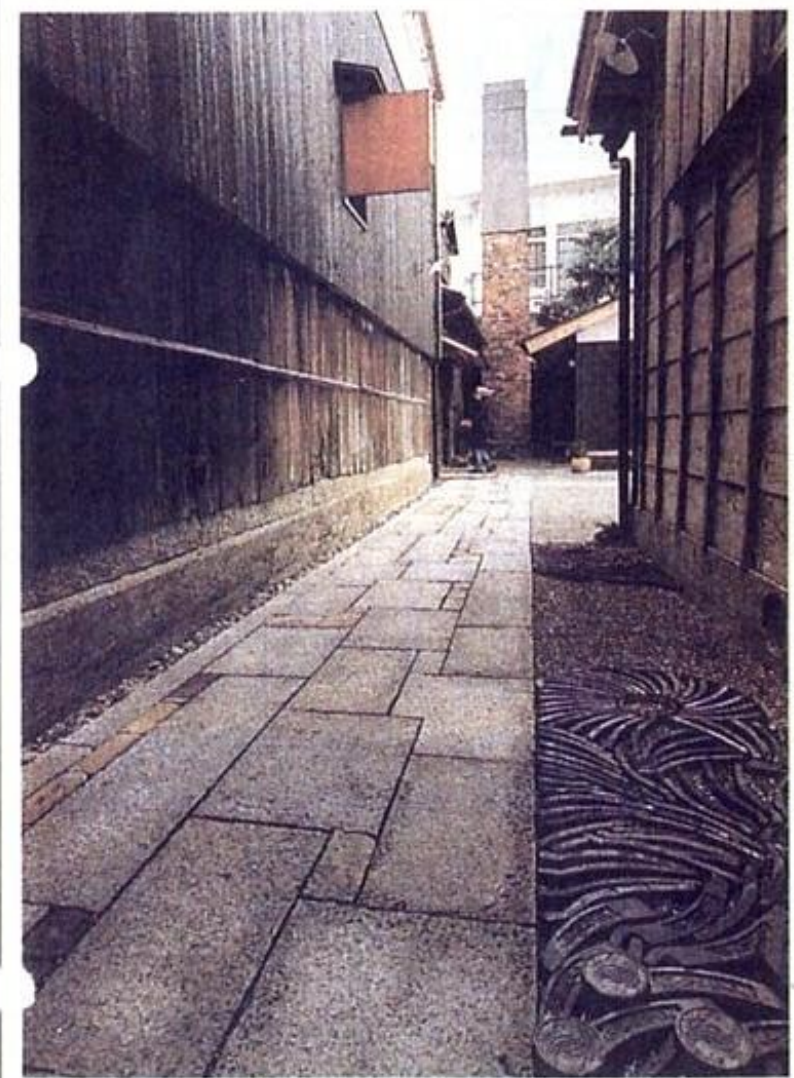
もあった。またここで、昭和二十年後半まで酒の量り売りも行われていたよである。二階は但馬や丹波方面から出た杜氏(とうじ)や蔵人の仮住い。蔵たちに虫害や腐食の被害は全くない。



## とくしま 見 再発 物建

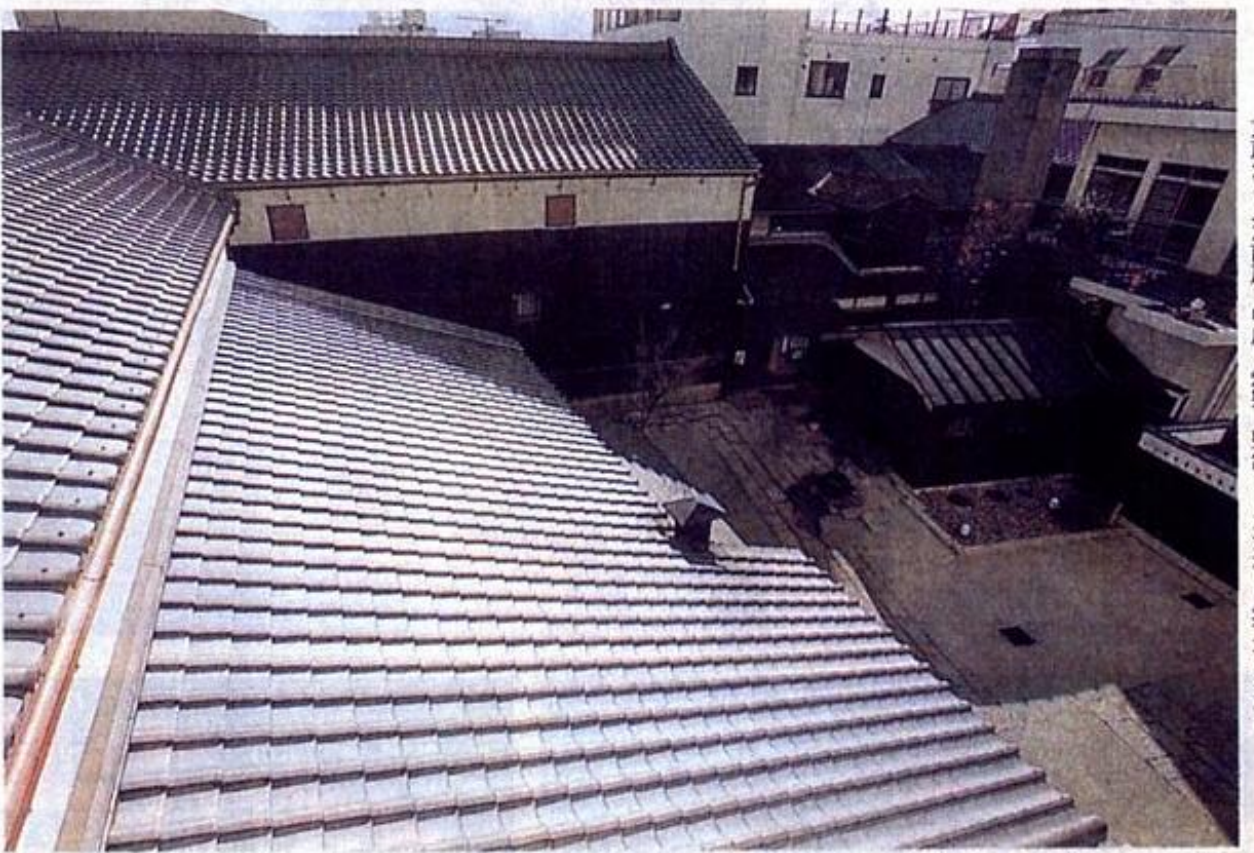
# 威風堂々のたたずまい

徳島市内の福島川に架かる福島橋の上から北の方を眺めると、藩政時代に植えられた左岸の松並木が川面に影を落とし、ボランテアによる観光遊覧船が行き交う。野鳥や渡り鳥の姿も多い。右岸には川に向かって開放されたレストランや灯台が建ち、市内の観光スポットの一角となっている。その東側、道路を挟んで一九〇二(明治三十五年)創業の造り酒屋、勢玉酒造のたたずまいがある。



東蔵と南蔵の間の路地から煙突を望む。足元には古いかわらが埋め込まれ、石畳に変化をつけている

東蔵と南蔵の間の路地から煙突を望む。足元には古いかわらが埋め込まれ、石畳に変化をつけている



北蔵から見た南蔵、中庭、煙突。整然としたかわら屋根が目を引く

半間(約九寸)ごとに立っ太い柱と、連続した梁(はり)が、必要不可欠であったであろう。蔵も煙突も道路から少しずれたところにあり、何気なく通り過ぎる人が多く、ここに酒蔵が存在していることを知らなかった人も多

▲メモ▼勢玉酒造 徳島市福島1丁目4番、勢井正博社長。登録有形文化財 1996年施行の改正文化財保護法で、保存および活用についての措置が必要とされる文化財建造物を、文部科学大臣が文化財登録原簿に登録する「文化財登録制度」が導入された。都市開発の進展、生活様式の変化などの理由により、社会的評価を受ける間もなく消滅の危機にさらされている多種多様な近代建造物を後世に継承していくため、緩やかな保護措置を講じるもの。2000年4月現在、全国で1559件(732カ所)の建造物があり、本県では28件(9カ所)。



北西から見た原田家住宅。武家屋敷のたたずまいに藩政時代の雰囲気漂う

# とくしま 見 発 再 建 物

15

また沖州などに数軒あった阿波水軍の船頭たちが住んでいた水主屋

## 秀逸な造りの武家屋敷

### 原田家住宅

敷が次々と失われていく矢先、かちどき橋(旧富田浦町)三丁目に武家屋敷が存在することを知らされた。それがこの原田家住宅である。

二十年前、徳島市福島一丁目に残っていた武家屋敷の長屋門が壊された。



屋敷のほぼ中央が主屋で、東に門(昔の写真で見ると中規模な薬医門)がある。主屋の南西角に湯殿が廊下でつながれ、少し離れた西筋に三棟の蔵があった。主屋の周辺は、南筋にプライベートの部屋を並べたためか、南の庭は花きを中心に植えられている。その一角には、現在、県庁駐車場にある桜と兄弟の蜂須賀も移植された。ほかの空地は、大きな青石を組んで造った庭を飛び石で結んだ見事な庭園となっている。

往時の形で残っている。東正面と北面からは平屋に見え、南と西面からは二階建てに見える一部二階建ての舞良戸がある。

二階には八畳と六畳の間があり、八畳の間には、南に半間の窓がなく薄暗い。六畳の間は八畳の間より一段高く、窓は西にあふきの大屋根は、本がわらと棧がわらを併用するなど、当時の建物としては秀逸な造りである。

オモテの奥にある九畳の部屋が上下段の間の役割を果たしており、その奥が茶室だ。建物のほぼ中央に仏間があり、仏間の背面には舞良戸があり、これを開けると二階に通じる階段がある。

この建物も老朽化が進んでいるため、このほど大規模な修繕をすることになった。約一年をかけての工事が完了する予定だ。完成すると文化の拠点、後世に残る遺産として地域の原風景となるに違いない。(森兼三郎・日本建築学会会員、徳島市八万町二丈、写真は末澤弘太)



玄関の間から東廊下に通じるとびら。杉皮で編まれた格畳文様が風情を醸し出す

唯一残った主屋は一部改造の跡が見られるが、ほぼ



オモテ座敷の間。天袋画は森住貴魚、額は14代藩主の蜂須賀茂韶の書、幅広の襖の上部には富士の透かし彫り欄間がはまっている

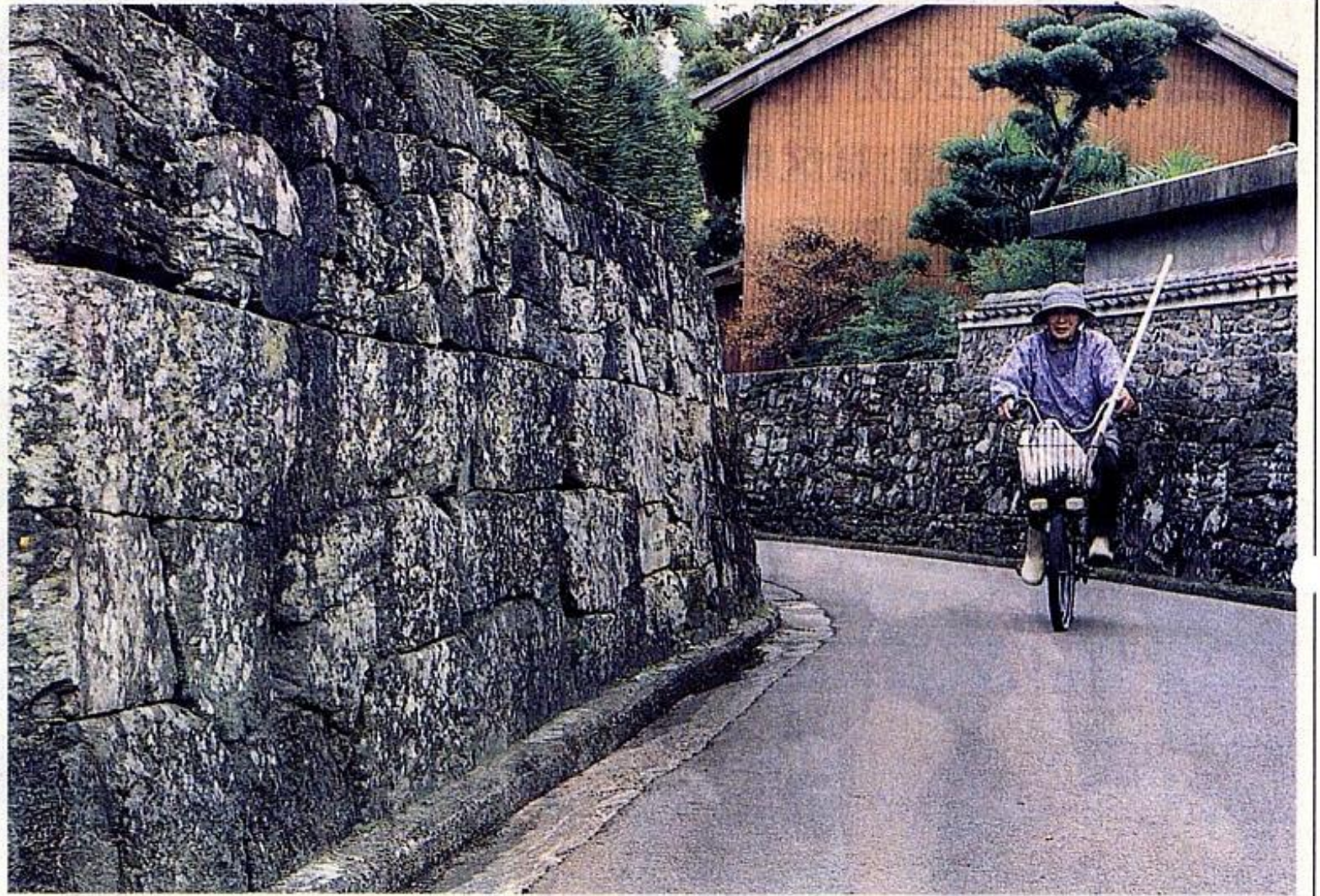
▲メモ 武家屋敷 武士がその主君から賜って住んだ屋敷。太平洋戦争の空襲でほとんどが焼失し、徳島城下の遺構はほとんどない。原田家住宅は、江戸時代後期から幕末ごろの建物。造形の規範となるとして、2000年5月17日に国の登録文化財に指定された。原田弘基氏所有。

蜂須賀桜 カンヒザクラの系統で花びらの色が濃く、ソメイヨシノよりも開花が早い。2月中旬に開花し、3月中旬まで咲く。現在、有志が接ぎ木などをして保存、普及に努めている。

# とくしま 見 発 再 建 物 づく

20

徳島市八万町のほぼ中央、冷田川沿いに開けた地が夷山地区である。冷田川は、藩政時代には現在の瀬川より広く、夷山城(現在の圓福寺)辺りまで船の往航があった。関東大震災で一筋ほど隆起し、戦後塩害を防ぐために下流に水門を築造し、上流をせき止めて瀬川を改良したため、現在の姿になった。夷山の由来は、いつのころか定か



戦国時代の城郭にも積まれた石積み工法が残る町並み。中段、一筋に延びた目地が目を引き

## 石垣のある町並み(八万町夷山)

ではないが、事代主神社(えべっさん)が夷山城跡の小山に鎮座していたためであり、戦国時代にはその地に夷山城。当神社は一八七〇(明治)で長曾我部元親が土佐に退

# 心和むやすらぎの空間

三二年に通町の現地に遷座。夷山地区の北側は、近年になって虫食い状態に開発され、分譲化された。敷地は

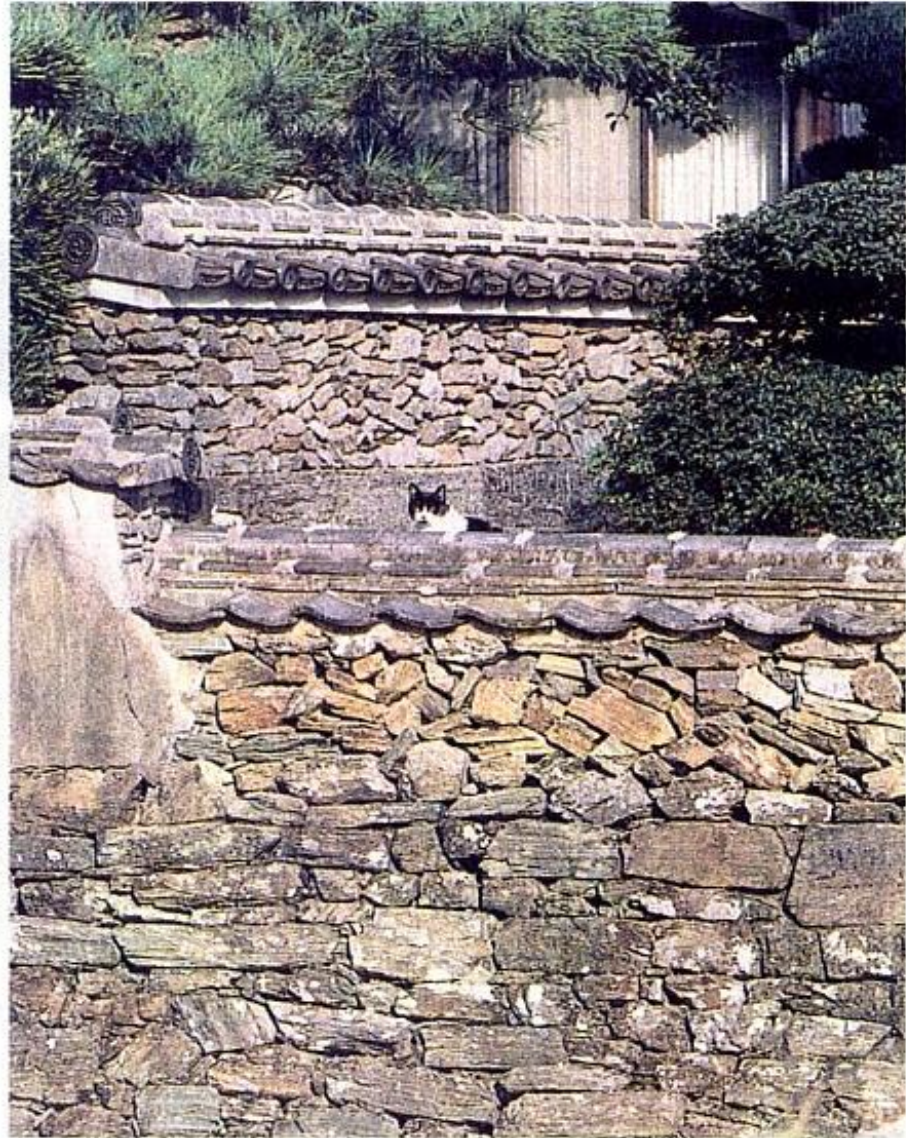
国時代の伝統的な積み方であり、各所の城郭にも多く見られるものである。裏(芯)込みがしっかりと通っているのが実

去した折、当時の城主も土佐に走ったと伝えられていることから、この時期に廃城されたと推定できる。現在は城跡頂上に戦没者を祭る忠魂碑が立ち、周辺は公園に整備されて、昔の面影はほとんどない。

石垣を築くには、その地を開墾した時に搬出した石や、近辺の山から切り出した石を使用するのが一般的であるが、この地区のものはそうではなかった。眉山(石垣)を築いて屋敷を構えた。特に、庚申堂から南へ少し進んだ辺り、路地の両側に延びる石垣の景観は、この地区を代表するものである。ここ以外にも数カ所、石垣塀やイブキ・マキなどの生け垣が屋敷の周りで見られる。これら

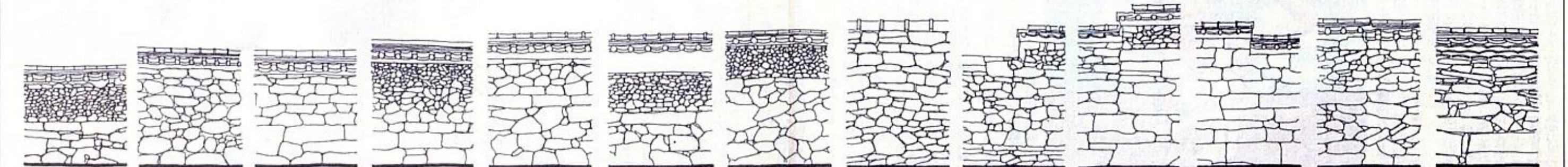


ク塀、ネットフエンスなどを巡らす、何とも無味乾燥なものが多くなる。プライバシーを保つために、建物のプランなどは閉鎖的になり、近所付き合いも少なくなってきた。この石垣を築くには、その地を開墾した時に搬出した石や、近辺の山から切り出した石を使用するのが一般的であるが、この地区のものはそうではなかった。眉山(石垣)を築いて屋敷を構えた。特に、庚申堂から南へ少し進んだ辺り、路地の両側に延びる石垣の景観は、この地区を代表するものである。ここ以外にも数カ所、石垣塀やイブキ・マキなどの生け垣が屋敷の周りで見られる。これら



3段に築かれた石。頂部には本瓦が葺かれ、重厚な造りとなっている

この石垣や生け垣は、歴史的文化財であり、この地区の原風景でもある。加速度的に歴史的な遺産が消滅する中、地域一丸となって保存されることを望みたい。(森兼三郎・日本建築学会会員・徳島市八万町二丈、写真は末澤弘太)



# とくしま 見 再発 物建

25

棟に上がった鬼瓦。もともと鬼の発生は神といわれ、神様は高い所に降臨する



## 青蓮院(徳島市)

寺である上野国の青蓮寺 賀氏の保護を受け、青蓮庵 もに、阿波三庵として信仰を、宮井城西の丸(多家長と名乗ってからは「宮井別を中世から近世にかけて、が、現在の青蓮院の始まりは鳴門市撫養町の正興庵、阿南市長生町の吉祥庵と、麻植一族の祈願所とした。桃山時代の天正年間、土佐の長曾我部の侵略によって寺は壊滅するが、後に復興される。江戸期には蜂須

寺である上野国の青蓮寺 賀氏の保護を受け、青蓮庵 もに、阿波三庵として信仰を、宮井城西の丸(多家長と名乗ってからは「宮井別を中世から近世にかけて、が、現在の青蓮院の始まりは鳴門市撫養町の正興庵、阿南市長生町の吉祥庵と、麻植一族の祈願所とした。桃山時代の天正年間、土佐の長曾我部の侵略によって寺は壊滅するが、後に復興される。江戸期には蜂須

# 江戸末期の様式残す

堂は明治時代に改築され、本尊や脇仏(釈迦如来座像)が安置されている。また観音堂の横に、池を囲むように広がる庭は、江戸時代初期に造られた池泉

現在、山門と観音堂が、山に溶け込むようにひっそりとたたずみ、その他の寺院建造物はない。観音堂は明治時代に改築され、本尊や脇仏(釈迦如来座像)が安置されている。また観音堂の横に、池を囲むように広がる庭は、江戸時代初期に造られた池泉

一方、青蓮院の門は、柱頭部に大斗肘木、控え柱には木鼻、柱間には葦股(図参照)が付くなど、時代の



大斗肘木



木鼻



葦股

回遊式庭園で、三方の山をすのみであるが、この個性を借景して、より豪壮なものとなっている。豪放な滝石組や、石積みなどが欠損している。造園当時の姿は、いもの、整備すれば奥内、有数の庭園になることは間違いない。二十五、六年前までは、茶の湯や生け花の会などでにぎわったが、現在はその面影さえない。再開した黄檗宗寺院に建てられたものである。しかしながら、それらは柱頭部や柱に組み物や彫刻を使わず、簡素な造りが特徴で、鐘楼門とはなっていない。



黄檗宗寺院の総門に見られる小規模な二重門。二層部につらわれていた梵鐘は供出されて、鐘楼門の役割をこなしている

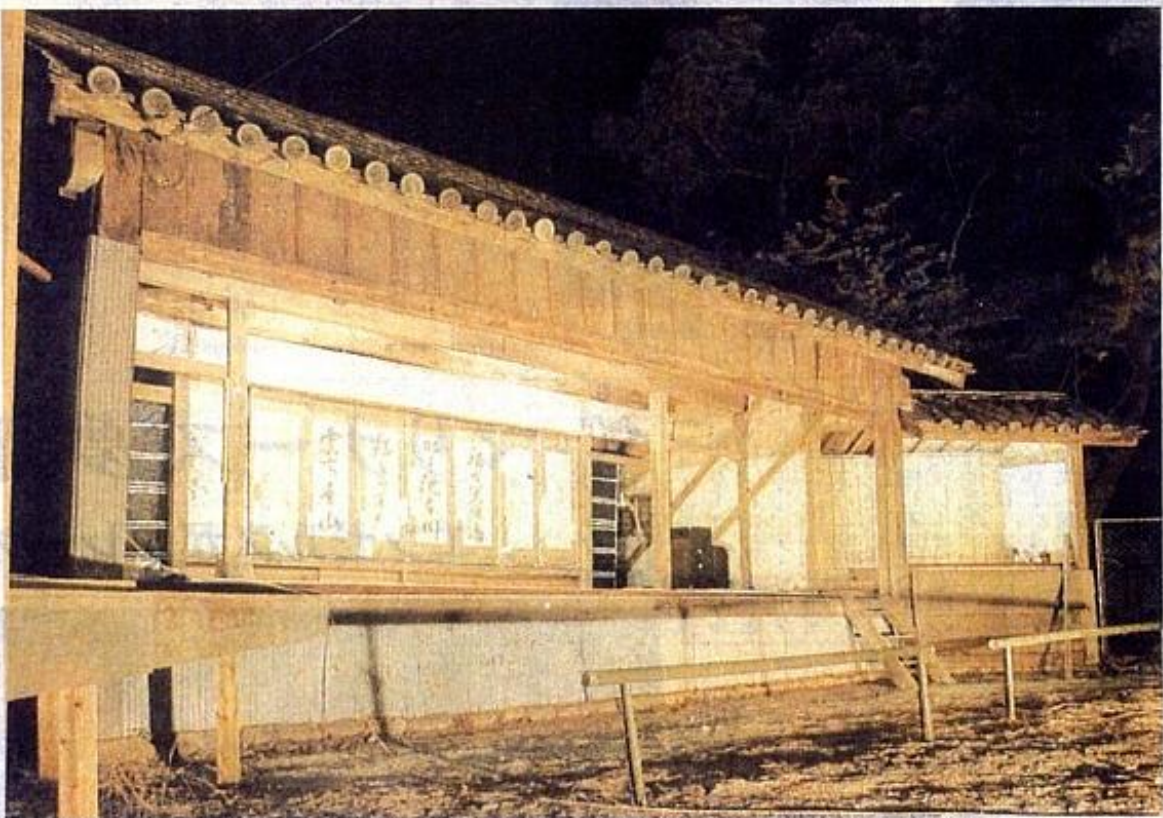
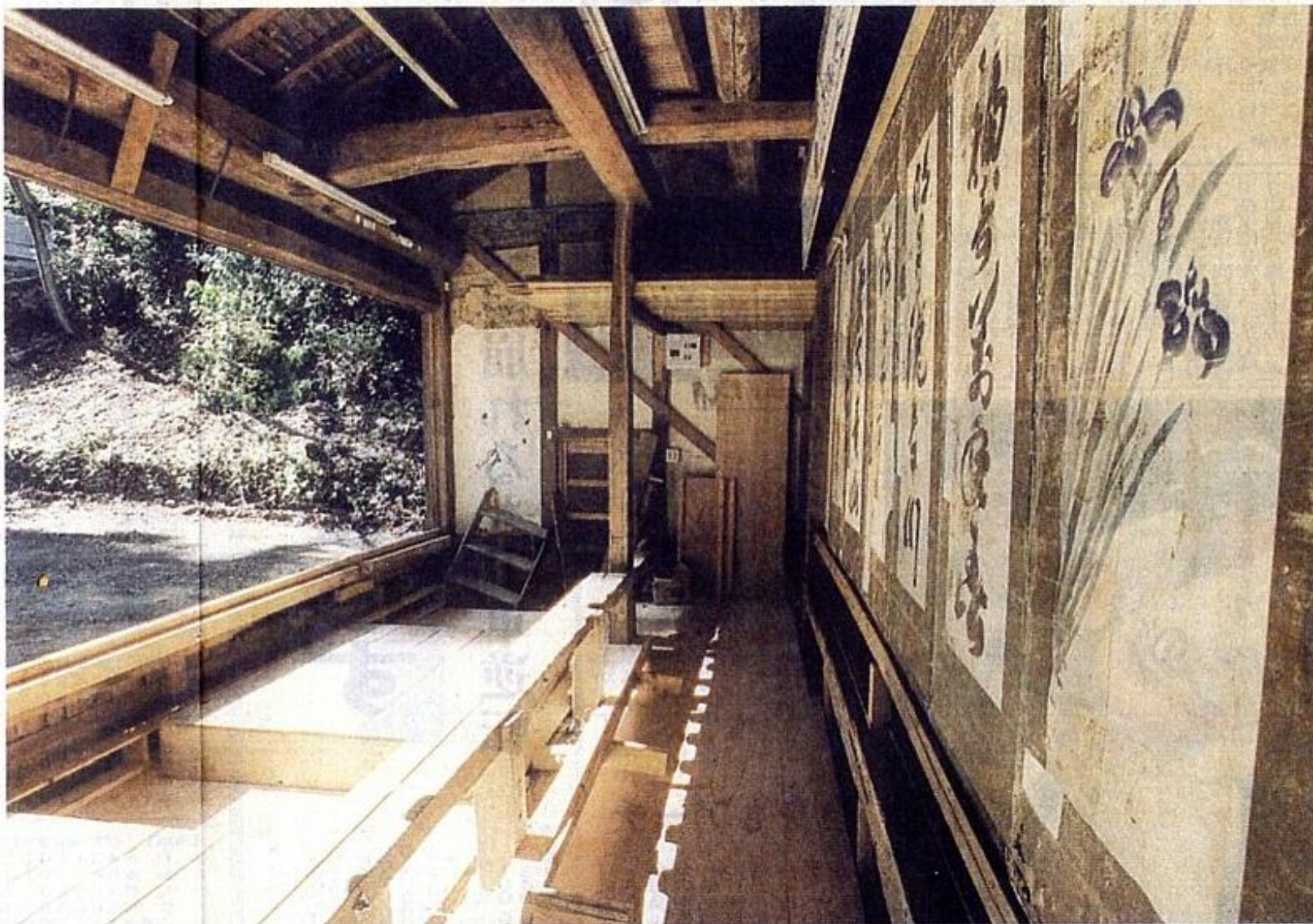


控え柱の柱頭部に付く木鼻。うず状の彫刻が、江戸時代の様式を顕著に表している

この寺を訪れるのは今回で三回目だったが、次第に老朽化が進んでいるのが懸念される。一日も早い保存修理がなされ、気軽に参拝や庭園の見学ができる日が来るのを待っている。

(森兼三郎・日本建築学会会員) 徳島市八万町二丁目八万八千二番地(太) 〓このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

舞台の前面(左)から1間分は二の手、その奥(ふすま絵の左)が本手。人形芝居上演時には二の手を本手より1段下げて舟底舞台にする



地元の大工さんによって応急処置が施され、復活を待つ舞台



# 人形芝居で舟底型に

## 今山の舞台(勝浦町)

那賀町の山間部を訪れたとあるれば神社が存在し、神社の境内には必ずといっては仕事もそこそこ舞台の調査に明け暮れ、日曜には夜明け前に家を出て山中で神社や舞台を探して回った。まだ幼かった子供を連れて調査に出かけることも度々あった。

の総合的調査研究に没頭し立ち、同二時から「今山ふた。徳島県は当時「松学舎れあい交流館」で、坂田泉教授と川上光洋氏の講演も行われる。

歌舞伎芝居は、床に段差がない平舞台が標準であるが、人形芝居となると前面に手すりが必要となる。舟底とは、二の手(前面から一間幅の空間)を本手(二の手よりさらに一間奥の空間)より一段床を下げる



二十八日、勝浦町の今山の舞台が復活する。上勝町旭の神明神社の舞台、神山町神領の小野の舞台に続いて、これで八つの農村舞台が徳島県内でよみがえることになる。舞台大徳島にとっても、私にとっても大きな出来事である。

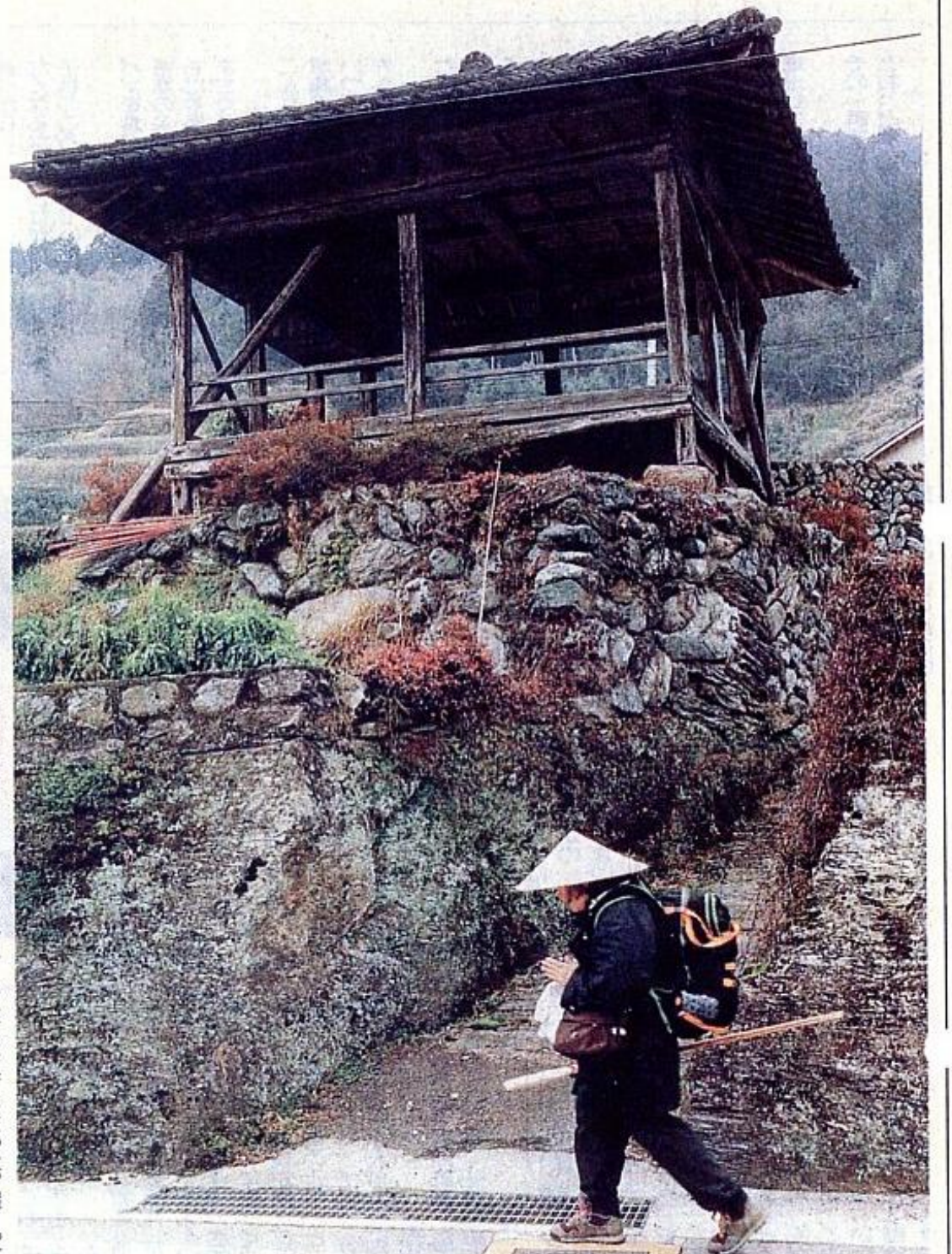
私と舞台との出会いは一九八八(昭和六十三)年、阿波学会総合学術調査で上



火伏せを願い、棟に青海波(波模様)を用いた本瓦ぶき屋根

大切に残存して後世に伝えたいものである。(森兼三郎・日本建築学会会員、徳島市八万町二丈、写真は末澤弘太)

農村舞台は全国的に存在するが、他県のは99%が歌舞伎のための舞台であり、徳島のそれはほとんどが人形浄瑠璃用の舞台である。これが徳島の舞台の第一の特徴であり、それは取りも直さず徳島の貴重な文化財であるということだ。



四方全開のお堂は庶民的で、お遍路さんの接待や憩いの場だった

部では氏堂、四足堂、茶堂とも呼ばれる。建築学的には平面から見るとは、

構造は、木造の宝形屋根で敷棟残っていたが、材料が基本形で、カヤやワラで、やカヤぶき職人の不足がふかれていた。つい最近まら、瓦や波トタンなどに代

### 小野の阿弥陀堂(神山町)

わって消えてしまった。屋根の下地から取り除いて切り妻や寄せ棟にするなど、材料や形態も替えられる場合が多く、鉄筋コンクリート造りや、鉄骨造りで改築

て、正面に仏壇や厨子を置いて本尊を祭る。一部の堂では、中央にいろりを切っている場合もあり、地域の集会所や共同の作業場としての用途を兼ねていた。本

共に床を張って、正面に仏壇や厨子を置いて本尊を祭る。一部の堂では、中央にいろりを切っている場合もあり、地域の集会所や共同の作業場としての用途を兼ねていた。本



# お遍路や旅人の休息場

て、柱間の数によって二間堂、三間堂などと呼び、間口と奥行きの間数が同じでない場合は、どちらが多い間数で呼ぶ。この場合、柱間の寸法の大小は問わず、半間以下の九十センチ程度であっても、三材を超える場合でも一間として扱う。

県内に建つ堂といえは、剣山の周辺に点在する宝形造りの堂、寺院の境内に建つ堂宇、村境のつじに建つ小規模な堂などが挙げられる。山間部などでは、字ごと、谷ごとに大小合わせれば膨大な数の堂が建てられた。

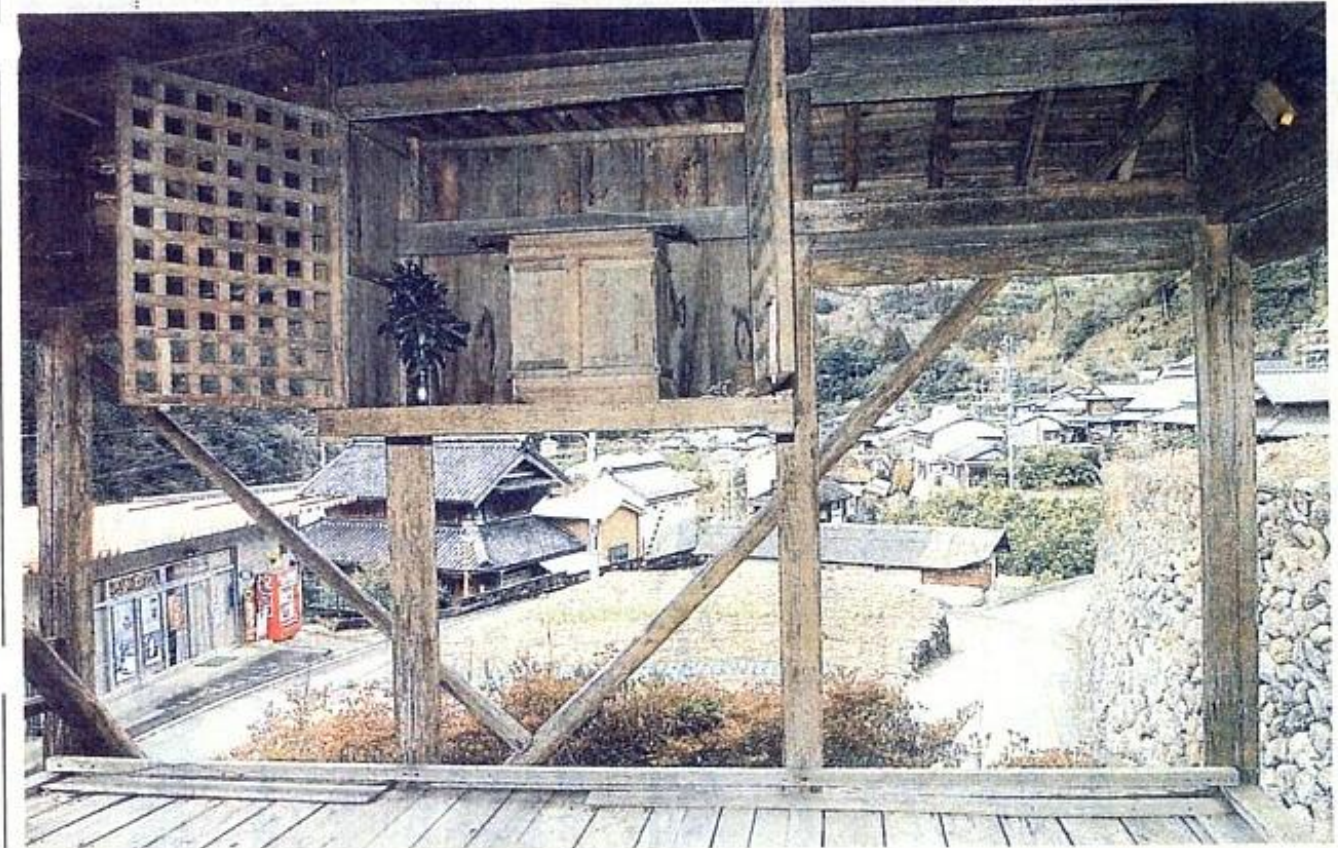
また間口、奥行き共に三間であれば三間二面や方三間と表現する場合もあるが、「小野の阿弥陀堂」というように、地名と本尊との組み合わせで呼ばれるのが一般的である。

安置されている仏像(本尊)によって阿弥陀堂、地藏堂、薬師堂などと呼び、建っている所在地(地名)で呼ばれる場合もある。

堂の起源は、行基や弘法大師の時代までさかのぼり、美郷村別枝の「谷の堂」には、八〇九(大同四)年の棟札があったと伝えられるほど歴史がある。県内に現存している堂のうち、最古のものは江戸時代初期で、中期のものも多く見られるが、桃山時代までさかのぼるものは見られない。多くが近年に改築されたが、宗教的な建物であるために廃絶されることはほとんどない。

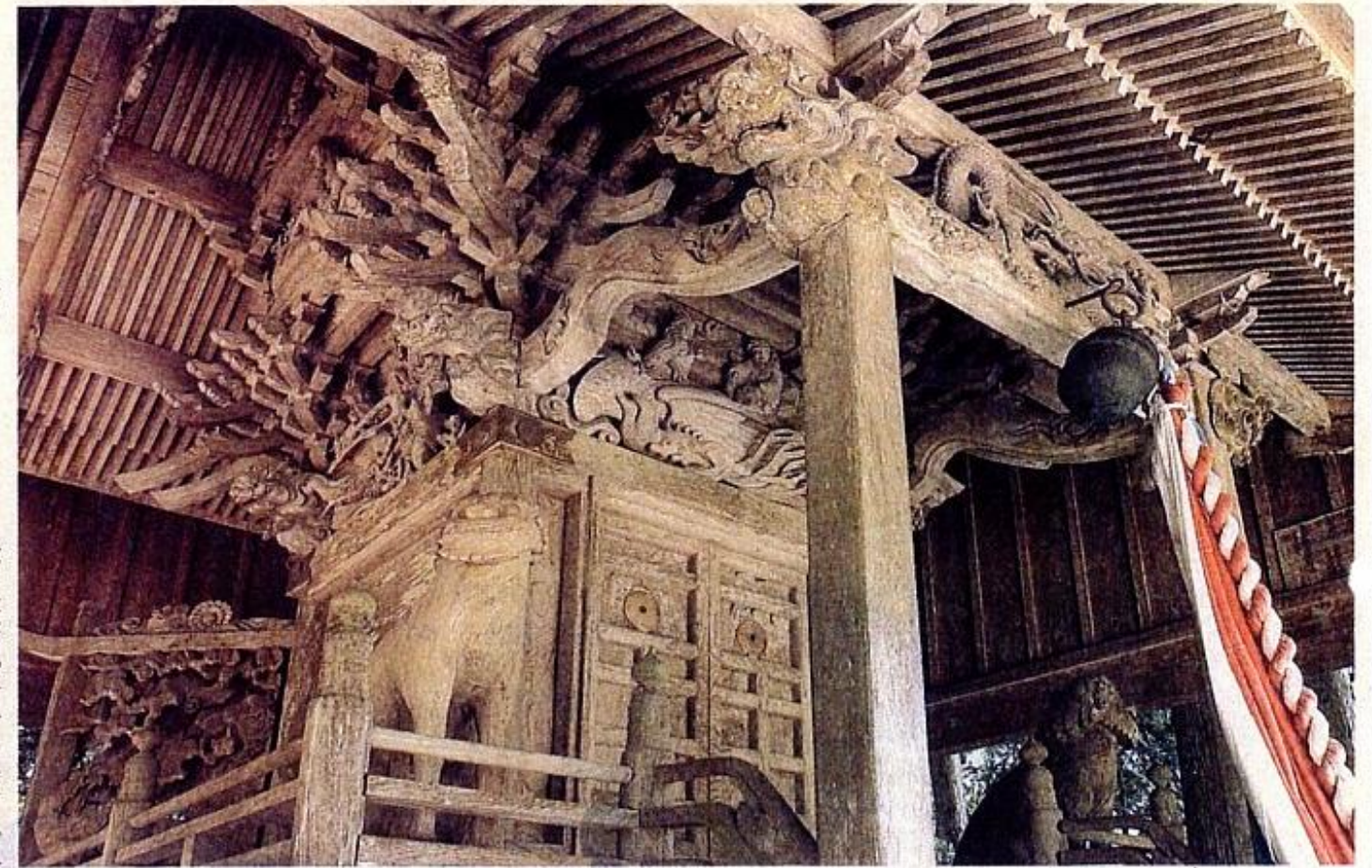
正面中央につられた仏間。信仰心の表れか、お堂には献花が絶えない。

正面中央につられた仏間。信仰心の表れか、お堂には献花が絶えない。



小野の阿弥陀堂は、神山町神山、小野地域の中心、JA名西郡小野出張所前の細の斜面に東向きに建つ。一八七七(明治十)年の小野の大火の後に建てられた。当時、カヤぶきの宝形屋根であったが、一九六五(昭和四十)年の改修時に、現在のスレート屋根に替わった。

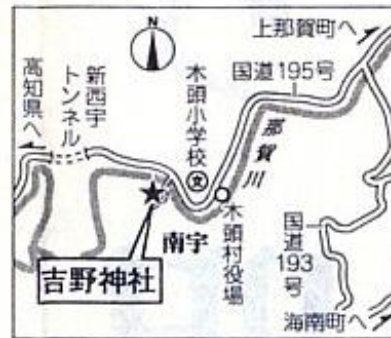
来は先祖の供養、祈ごと、護摩供養、光明真言百万遍念仏、盆や正月の行事などが行われていた。寺院や庵がないへき地では、お通夜などを行った堂もある。近代になると、各地に集会所や公民館などの施設が建ち、使用する頻度が少なくなり、維持管理も困難となった。小野の阿弥陀堂は、神山町神山、小野地域の中心、JA名西郡小野出張所前の細の斜面に東向きに建つ。一八七七(明治十)年の小野の大火の後に建てられた。当時、カヤぶきの宝形屋根であったが、一九六五(昭和四十)年の改修時に、現在のスレート屋根に替わった。一昨年、小野地区では天王神社の農村舞台が復活したこともあり、隠れている阿弥陀さんは、子供たちの誘いを待っているのかもしれない。(森兼三郎・日本建築学会会員 徳島市八万町二丈、写真は末澤弘太)



本殿の身舎や向拝には、組物や彫刻がにぎやかに施されている



鎌倉時代、ギョウ様式が日本に入ったときに使われるようになった木鼻



### 吉野神社本殿(木頭村)

# 梁や組物間に彫刻多用



える。

神社の起源は古墳時代に始まる。いやもっと以前から存在していたのかもしれない。山頂、台地の突端、峠、島など、人の住む全域

で祭祀跡は数多く発見されている。

私たちの先祖は、自然の万物に神の存在を感じ、神霊の力を認めた。祭祀の最大の目的は豊作祈願と感謝の儀礼であり、一定の場所

私たちが生活している周辺には、多くの宗教的施設がある。それは寺院であったり神社であったり、教会であったりする。それらの中で一番多く目にするのが神社である。

八幡、天神、諏訪、稲荷、神明、春日など、例を挙げればきりがないほどいろいろな社名があることに気づく。さらに一つの神社の中に複数の社殿がある場合も珍しくない。現在、全国には大小合わせて八万社がある。県内では千三百八十二社が神社庁に登録されており、それ以外のものを合わせると二千社を有に超

微とみなされたりすることになり、五、六世紀には神殿が建造されるようになった。神殿はその時代の宮殿からヒントを得、天地根元宮

平安時代になると、今でも私たちの周辺の神社に多く見られる平入りの流造や妻入りの春日造が誕生した。流造とは、切り妻で平入りの本殿の正面にひさしを付け、後方に短く前方に長く流れるように屋根を置

天地根元造 2本の丸太柱を揃って立てにしたものに棟木を渡し、2本の丸太を棟木に斜めにかけて合掌とし、カヤで屋根をふいたもので、神社建築の原型となった。妻入り 建物の棟に対して平行に出入りできるように入り口が設けられている。妻が見える方向。平入り 建物の棟に対して直角に出入りできるように入り口が設けられている。屋根の面が見える方向。虹梁 彫刻が施された梁。身舎 建物の主要部分。三手先 軒を深く出すために、壁筋から外側に三手(三列)出ている組物の形式。皿斗 柱の上部にある皿状の組物の一部。



明神鳥居越しに本殿を見る。境内には農村舞台も建っている

また向拝柱の頭部と妻飾りの下方に使われている皿斗や、向拝柱頭部に彫刻された木鼻は、鎌倉時代初期に日本に入った大仏様式や禅宗様式に採用されたものである。小規模だが、地方色や時代の様相が顕著で、随所に彫刻を多用する秀逸な建物である。太布織とともに、南宇の文化遺産としていつまでも守り続けてほしい。(森兼三郎・日本建築学会会員II 徳島市八万町二丁目、写真は末澤弘太) 〓このシリーズは毎月第2土曜日に掲載します。



# とくしま 見 発 再 建 物 庫



本堂のいばら付きの輪垂木や手挟(写真中央上の軒裏)が美しい。右後方に見えるのが簡素な大師堂

三加茂町の東端、国道192号とJR徳島線の南側に隣接した標高約五五〇坪の小高い山にある。数年前に調査に訪れたものの、道中の記憶が定かでない、江口駅で地元の方に尋ねると、「国道の真上で、道案内がなくても上に上に道をとれば迷わずたどり着くよ」と教えてくれた。

## 舞寺(三加茂町)

吉野川を背にいくつかのS字カーブを進むと、突然山中に民家と畑が現れ、やがて広場に着く。広場入り

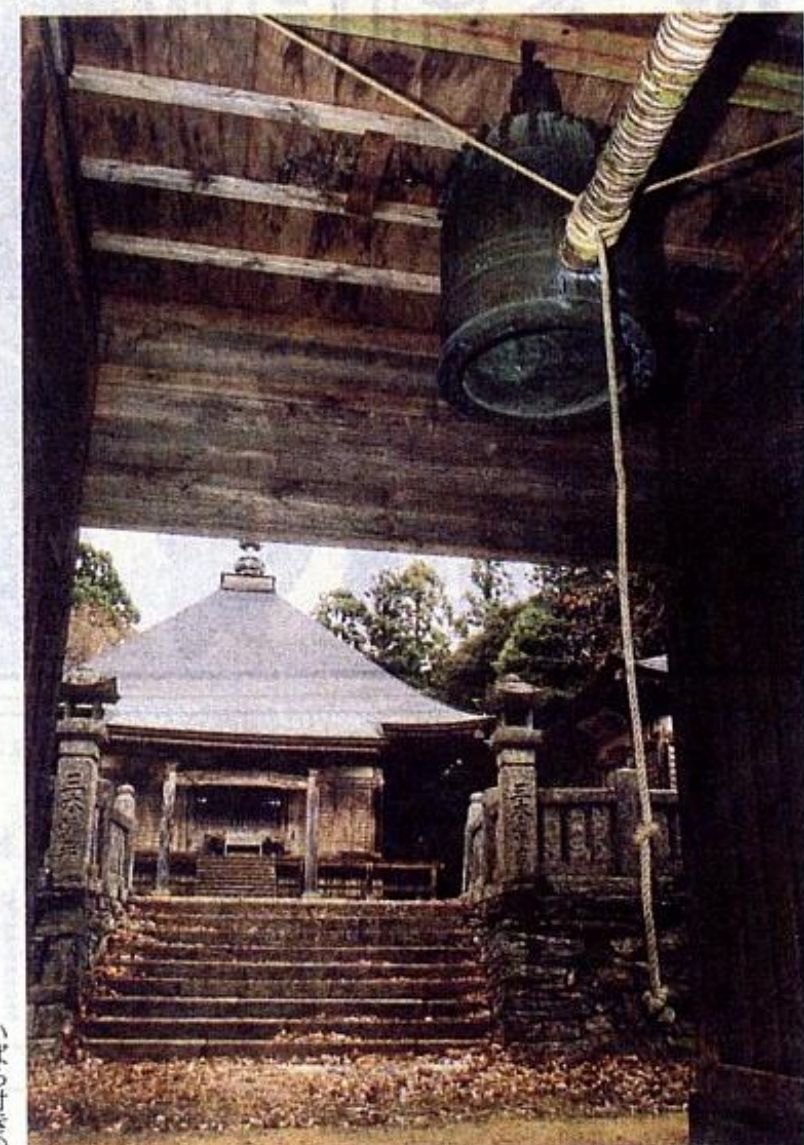
に寄せ棟造りの大師堂、左奥に一間社流造の鎮守社が立ち並ぶ。

## 幕末しのぶ精巧な彫刻

平野部でもこれほど立派な伽藍を持つ寺院は少ない。しかも建物も見劣りしない。しかも伽藍の中心に本大師堂の建立は、江戸時代末期までさかのぼる。山を二年で切り上げ帰国した

## 幕末しのぶ精巧な彫刻

山門は金剛力士像が安置された仁王門で、三間一戸八脚門の形態



山門越しに見る本堂は、幕末の寺社建築の様相をほつとさせる

特徴は、軒裏の垂木を建物の中心から放射線状に配する扇垂木とすることや、屋根を寄せ棟とすること、この時代の建物としては珍しい。鎮守社とは、寺院を守護する神のための堂宇で、「神は仏教を喜び、これを守る」とし、神仏習合の一つの表れといえる。規模も大きく、本格的な神社建築である。

寺もその一つで舞寺山頂に建つ山岳寺院であり、空海の開基と伝えられる。本堂は、正面三間(五・四・四)、奥行き四間(七・二・二)と標準的な規模の三間堂である。正面には、屋根の作と推察できる。また背面(後方)中央に大きな火窓を開くのは独特で、頭燈窓を備えるのは母屋柱の上部付近に獅子や狛犬などの木鼻をつけてにぎやかに飾るが、なぜか東面には形跡すらなく謎が膨らむ。

良好な環境にあって、過疎化した山頂にひっそりと建つ寺院であるが、今回も新鮮なシキミが供えられ、ちよびりろしい気分が下した。けれども行く末の不安も禁じ得ないのが正直な気持ちである。周囲の木々を少し整理すれば徳島平野の西部全域を見渡せる絶景が期待できる。桜や紅葉などを植えて整備すれば、観光スポットにもなると思うのだが。(森兼三郎・日本建築学会会員 徳島市八万町二丁目、写真は末澤弘太)

この向拝部分に多くの特徴が見える。それは向拝柱根元の石造礎盤(基礎)に線刻が施されていること、向拝柱頭部に皿斗と呼ばれるそろばんの玉状のものが入れられていること、屋根の傾斜を強くして、垂木が柱頭部の粗物も平三斗と簡素に仕上げる。この建物の

二このシリーズは毎月第2土曜日に掲載します。



1町ごとに建てられた丁石。木々の間にひっそりと立ち、道案内や伽藍までの距離を刻む

### メモ

三間一戸八脚門。柱間が3つあり、中央に通路があって、前後に8本の控え柱がある門。

一間社流造。開口を1間とし、本屋から向拝の屋根までぶき下るす形の神社形式。

皿斗。鎌倉時代初期の東大寺大仏殿再建時に、重源上人が宋から移入した大仏様式に使用された部品。扇垂木・火灯窓。鎌倉時代初期、禅宗を導いた時に、宋の様式を取り入れた禅宗様式に使用された部材。

幕股。建築彫刻の一種で、かえりがまたをかけたような形状のもの。手挟。向拝と本屋をつなぐ軒裏に設けた化粧板。

平三斗。柱の上部に設けた粗物で、大きな升の上に小さな升を3つ並べた形状。

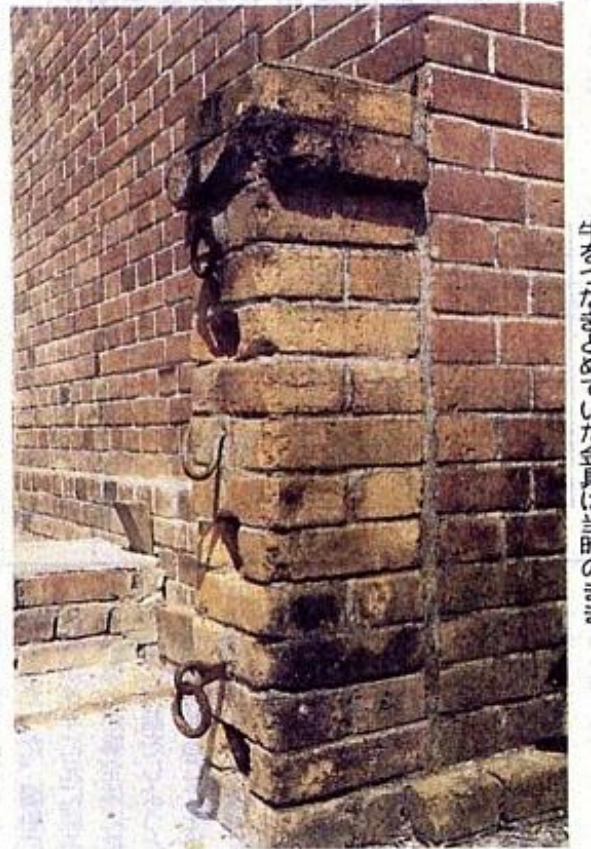


第一次世界大戦に参戦した日本は、一九一四(大正三)年に青島を攻略。四千人余りの捕虜を日本各地に送り、徳島市富田浦(現在の県庁付近)にも一部が収容された。一六年四月、板野郡板東町(現在の鳴門市大麻町板東)に収容所が新設されると、富田浦や松山、丸亀の収容所から九百五十三人が移された。

その捕虜のなかには、酪農や建築の優れた技術者がいた。彼らの知識や技術を受け入れて産業開発に役立てようと、県の畜産技術師

とくしま 見 建 物 再 発

50



牛をつなぎとめていた金具は当時のまま

で建築技術のシニラーターが設計を担当した。地元の大工、左官、捕虜ら三十人余りが五カ月をかけて第一期工事(西棟と東棟の約半分)を完成させた。一九一八年、第二期工事で増築し、海軍出身の獣医・船本宇太郎を招いて管理人とした。その後、牧舎はドイツ人技術師による科学的な飼育管理など技術向上に重要な役割を果たした。

一八年十一月、戦争が終結。二〇年一月、最後の捕虜は互いに殺し合おうという暗い

船本牧舎(鳴門市)

廣が掃蕩してまもなく収容所は閉鎖された。戦時下の混乱期にもかかわらず、二十二年十月の

捕虜しのぶ「平和の象徴」

収容期間中、こゝろを、さすままなドラマが生まれ、純朴な地元民とドイツ兵たちとの心温まる交流が、捕虜として収容された兵士たちを受け入れた。遠い異国での収容生活の中でみせるドイツ兵たちの活発で豊かな文化活動

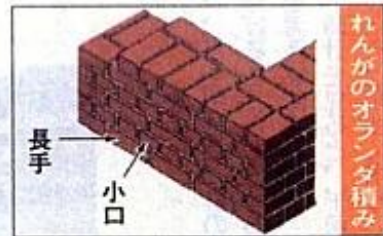
管場所。勤勉で文化を重んじるドイツ人への配慮から、東棟の三十六畳分を土壁で間仕切って独立した部屋を造った。また、牧舎内の自然換気のために屋根の上部に越し

屋根をつけた。構造は「混面が表れる」ド構造で、一階をれんが造り二階を木造とし、れんがと外壁に塗った漆喰のコントラストが交互に積み重ねる「オランダ積み」とした。窓は「オランダ積み」とした。窓を高く、夏涼しく、冬暖かい環境のもとで飼育されたために、加工品も良質なものがあった。

二階東側の部屋では、日本の社会運動の草分け、賀川豊彦による日曜学校や阿波農民福音学校が開かれた。鳳凰閣はすでに姿を消したが、ドイツ橋やドイツ兵慰霊碑などは、大麻比古神社裏の丸山公園とドイツ村公園に保存されている。



松江豊寿(1872-1956年) 福島県会津若松生まれ。軍人、政治家。1914年から6年間、徳島・板東俘虜収容所所長。会津若松市長も務めた。

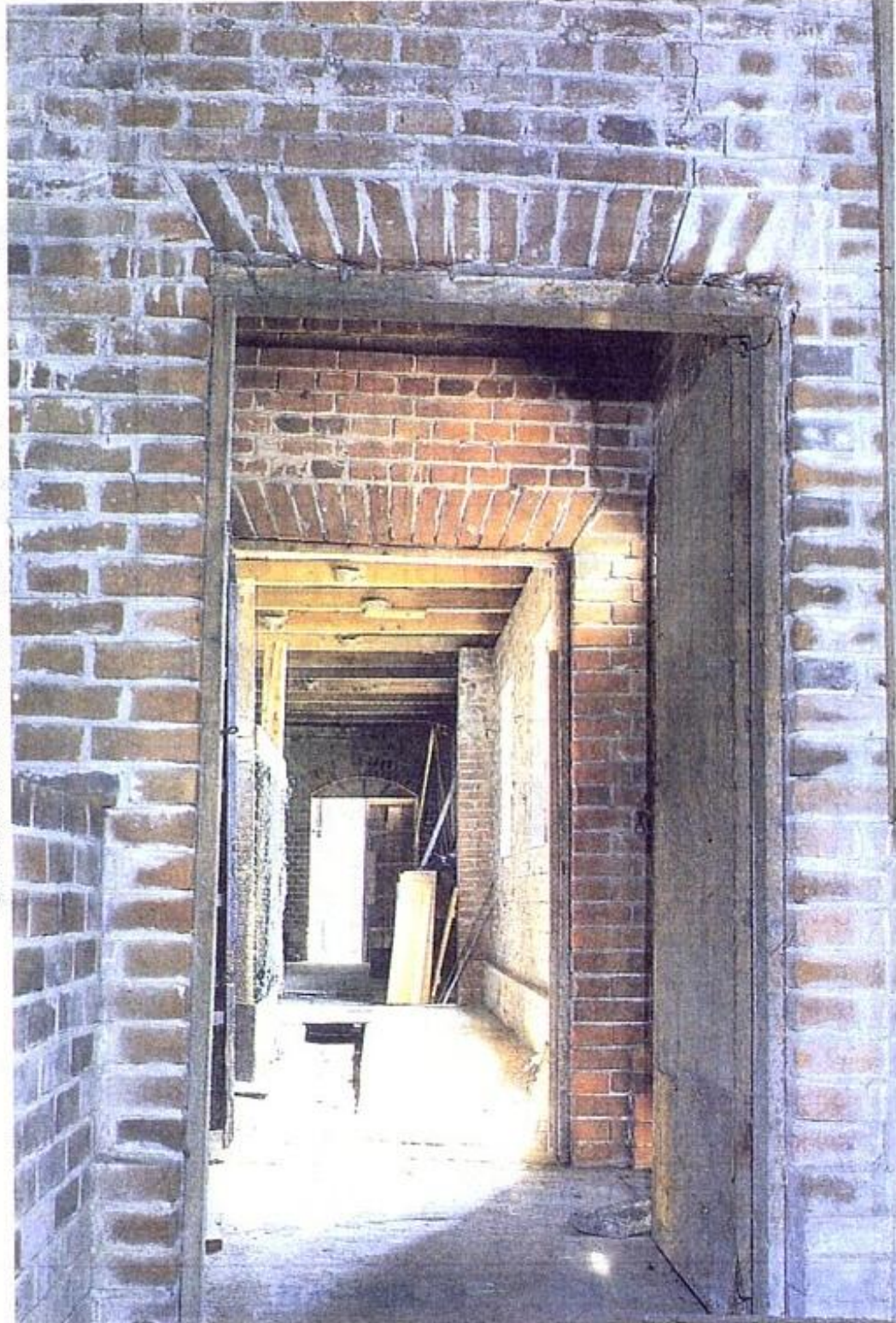


れんがのオランダ積み

した。一階は東棟を牛舎、西棟の南側を豚舎とし、ほほ中央に飼料庫を配置し、北西の隅に豚の屠場と燻製場を付設した。二階は主に麦わらや稲わらの保



1階はれんが造り、2階は木造。れんがと白壁のコントラストが美しい



オランダ積み。れんがで仕切られた牧舎内部

二階東側の部屋では、日本の社会運動の草分け、賀川豊彦による日曜学校や阿波農民福音学校が開かれた。鳳凰閣はすでに姿を消したが、ドイツ橋やドイツ兵慰霊碑などは、大麻比古神社裏の丸山公園とドイツ村公園に保存されている。

このように戦時下で敵味方なく交流したことを省みれば、心温まることが多く、この牧舎は平和の象徴として保存すべき建築物である。(森兼三郎・日本建築学会会員、徳島市八万町二丁、写真は末澤弘太)

二九年、このシリーズは今回で牧舎は、管理終わります。